

ドイツ・ヨーロッパ研究における「インサイダー」と「アウトサイダー」 2023 年 DAAD センター会議に参加して

富岡 昇平

はじめに

2023 年 3 月 28 日から 4 月 1 日の 5 日間にかけて、ドイツ・ベルリンで「世界の中のドイツとヨーロッパ：内部と外部の視点から (Deutschland und Europa in der Welt: Perspektiven von innen und außen)」と題する DAAD センター会議が開催された。本センター会議は、本来ならば 2022 年 12 月にイスラエルのハイファ大学にて開催される予定であったが、延期の末、約 3 か月遅れで開催されることとなった。内容としては、センター長会合や複数のパネル、院生ワークショップ、ネットワーク・フォーラム、ベルリン市内ツアー等の企画によって構成されており、ヨーロッパや北米、南米、中東、アジアの各国に存在する約 20 のドイツ・ヨーロッパ研究センターから代表者が集合した。東京大学のドイツ・ヨーロッパ研究センター(DESK)からは、平松英人講師、田村円氏、瑞秀昭葉氏、富岡昇平(筆者)が参加した。本稿では、筆者が参加した院生ワークショップの内容を中心に、この DAAD センター会議の様子を紹介したい。

院生ワークショップ

筆者がこの度参加することとなった院生ワークショップには、世界各国のドイツ・ヨーロッパ研究センターから派遣された修士課程・博士課程の学生が計 14 人参加した。ワークショップにおける基本的な使用言語は英語となっている。そして、今回の DAAD センター会議からは、初めての試みとして院生ワークショップを三部構成で行うこととなった。その内の第一部が 3 月 28 日に開催された「学際的なプリズムで考えるドイツ・ヨーロッパ研究」である。ここでは、まず初めに参加者全員に対して自身の研究内容を報告する機会が与えられた。その際、筆者自身も「東ドイツ・ライプツィヒ県における環境破壊と日常生活」というタイトルのもと、東ドイツの環境問題に関して市民が行った請願の内容や行政機関による対応の様子を紹介した。そして、参加者全員の研究紹介が終了した後、5 人単位でグループを構成し、各々の研究プロジェクトの間に見られる類似性や相違点に関して議論を行った。筆者のグループには歴史学から二人、社会学と政治学、文学からそれぞれ一人ずつの学

生が参加していたが、全員の関心は一次資料の分析方法に向かっていたと言えよう。それぞれの参加者が用いる一次資料は文学テキストや文書館史料、インタビュー結果など大きく異なっていたが、これらの資料を分析する際にアクターの特性を考慮し、正しい文脈の中に位置づける必要があるとグループの中で意見の一致が見られた。また、グループワークの後に全体で行われた議論では、資料の収集及び分析をどの段階まで続けるべきかという問題が提起された。この問題提起に対しては、制限された時間の中で研究プロジェクトを完遂するためにも、使用する資料の分量は限定しつつも、その選別段階において明確な基準を提示する必要があると意見が提示された。

翌日の 3 月 29 日に開催された院生ワークショップの第二部では、ベルリンのコンサルティング企業“WITOS Berlin”から専門家が招待され、研究者のメンタルヘルスの問題が取り扱われた。ここで重要とされたのが持続可能な研究環境を築くことであり、そのためにワークライフバランスを自ら管理する必要性が強調された。具体的には、メールやソーシャルメディアを主とする通信手段との付き合い方や一週間のスケジュールの中で自分の時間を確保することの重要性が指摘されている。その他にも、参加者に対して二つの小さなアクティビティが提供された。一つ目は、中期的な目標設定に関するアクティビティであり、参加者は今後二週間の「最低限の目標」、「理想の目標」、「両者の中間的な目標」を立てることが求められた。継続的に研究を行うためには、常に理想的な目標を追い続けるのではなく、一定程度自分自身を「許容」する必要がある、「中間的な目標」の中にその妥協点を見つけることがこのアクティビティの意図であった。第二のアクティビティは、用事の断り方に関するものである。時間的猶予が無いにも関わらず用事を引き受けることは、最終的に良い結果をもたらさないという考えから周囲との人間関係を保ちつつも、明確に“No”という方法に関して各参加者は自身の過去の経験に沿って議論を行った。

そして、4 月 1 日に開催された院生ワークショップの第三部では、特に人文学の研究を行っている博士課程の学生に向けて、大学外で企業に就職する際の履歴書の書き方がレクチャーされた。このようなテーマ設定の背景には、以下のような状況が存在する。すなわち、長期的な観点から見ると、ヨーロッパで人文系の博士号を取得した学生の内、約 30%しか学術的なポストに残留できていないということだ。ワークショップ第三部の前半では、博士課程の研究活動の中で培われたスキルのうち、何が企業就職の際に有効利用されるのかという点に関して、「分析能力」と「処理能力」、「創造性」、「コミュニケーション能力」という 4 つの観点から話し合った。その後は、特定の人物の学術的な履歴書と企業就職の履歴

書を見比べ、両方の場合において何を書くことが求められているのか、どのような項目に優先順位を置くべきか比較を行った。そして、ワークショップの最後には各参加者が準備してきた学術的な履歴書をもとに、企業就職に向けた履歴書を作成するアクティビティを実践した。

講演・パネルなど

次に、筆者がセンター会議の期間中に出席することができた講演やパネルに関して言及していきたい。今回の会議期間中には全部で 10 の個別パネルが準備されていたが、その内の一つが 3 月 30 日に開催された「私たちの文化、私たち自身 (Our Cultures, ourselves)」であった。同パネルの最初の報告者となったのはバーミンガム大学の Franziska Wolf 氏である。彼女はイラク系ドイツ人の作家 Abbas Khider を中心に、移民の背景を持つ作家の文学作品を彼らの「中間(In-between)」的アイデンティティに焦点を当てつつ分析した。第二の報告者は東京大学の DESK に所属する瑞秀昭葉氏である。彼女はドイツの性科学者マグヌス・ヒルシュフェルトの研究を対象に、20 世紀初頭のドイツにおいてトランスジェンダーに関する概念が形成されていく過程を示しつつ、その概念が持つ問題点を指摘した。そして、最後の登壇者となったのがケンブリッジ大学の Mark Seow 氏である。彼は音楽学の観点から「汗をかく」という行為の持つ意味を、18 世紀のライプツィヒ及び 21 世紀のベルリンーベルリンに関しては特にゲイ・クラブとトルコ人ムスリムが分析の対象とされた一の比較を通して描きだした。三者の報告は、対象とする時代だけでなく、学術分野(文学、歴史学、音楽学)も大きく異なるものであったが、パネル全体を通して、ドイツ社会におけるアウトサイダー的な社会集団の存在や彼らの持つアイデンティティの問題を提示することに成功していたといえるだろう。

3 月 31 日には、DESK の平松英人講師と田村円氏、そしてハレ大学・第一哲学部歴史学科の Manfred Hettling 教授が登壇したパネル「公共性と歴史像の多様性：ヨーロッパとアジアにおける集合的記憶と和解 (Öffentlichkeit und Diversifizierung des Geschichtsbildes. Kollektives Gedächtnis und Versöhnung in Europa und Asien)」が開催された。第一登壇者となった平松講師は、日本基督教団と沖縄キリスト教団、在日大韓基督教会を対象に、各組織の戦後の関係修復の過程を「和解」と「合同」という概念に着目して分析した。第二の報告者となったのは Hettling 教授である。彼は豊臣秀吉の朝鮮出兵を契機に日本で建立された耳塚を取り上げ、日本と韓国の両国家における耳塚に対する認識の相違をより長期的な観点から

描き出した。そして、最後の報告者となった田村氏は、戦後西ドイツにおけるドイツ人とユダヤ人の和解の過程を、コンラート・アデナウアーら政治家の言説及びローカルな市民運動の存在から明らかにした。本パネルにおいて最も議論が紛糾した点は、各登壇者の報告後、Hettling 教授が提示した問いに関するものであろう。すなわち、ドイツの「過去の克服」の過程は他の地域においても「手本 (Vorbild)」となりうるかという問いである。この問いに対しては聴衆から数多くの意見が示されたが、やはりヨーロッパの事例を直接的にアジアに適用することは様々な困難を抱えていると考えられる。そのため、田村氏が報告の最後に指摘したように、ドイツにおける「過去の克服」の過程において、どのような要素が他の地域でも参照できるのか、より詳細な次元での検討が必要となるだろう。

また、ここではさらに本センター会議の最も中心となったテーマに関しても言及したい。それは、ウクライナ戦争が発生した現代において、ドイツが国際政治的観点から果たすべき責任と役割に関する問題である。この問題意識は、本センター会議初日に行われたエルサレム・ヘブライ大学 Dan Diner 教授の基調講演において明確に示された。彼は「時代の転換点－1989 年から 1848 年のドイツ史」と題した講演を行ったが、ここで用いられた「時代の転換点 („Zeitenwenden“)」という言葉は、ウクライナ戦争勃発後の 2022 年 2 月 27 日に現ドイツ首相オラフ・ショルツ氏が行った演説から引用し、変化を加えて－ショルツ首相の演説の際は、“Zeitenwende“と単数形であった－使用されたものである。Diner 教授はドイツ史の転換点となった年号を 1989 年から遡りながら紹介しつつ、冷戦期の間でも連邦共和国が西側を志向した外交政策を継続していたと指摘し、ヨーロッパ大陸の大国であるドイツがウクライナ戦争下の現代においても担うべき責任に関して言及した。

また、このテーマは 3 月 31 日に行われたクロージング・セレモニーにおいてもさらに展開された。クロージング・セレモニーでは、フランスの学際的ドイツ研究センター(CIERA)から Marsha Cerovic 博士、ベルリンのヘルティ大学から Marina Henke 教授、ポーランド・ブロッツワフ大学から Krzysztof Ruchniewicz 教授、アメリカの現代ドイツ研究所(AICGS)から Jeffrey Rathke 氏が招待され、ウクライナ戦争におけるドイツの役割が議論された。各登壇者は、独仏、独米、そしてドイツ－ポーランド関係の視点からこのテーマに関して言及を行ったが、二国間関係の観点から現状を分析した場合、各国がドイツに求める役割、責任の多寡は明確に異なっており、大変興味深かった。「内部と外部の視点から見るドイツ」という本センター会議のタイトルに相応しいクロージング・セレモニーになったと言えるだろう。

結びに

最後に筆者が本センター会議に参加した感想、そして今後の抱負に関しても言及したい。第一に筆者が主に参加することとなった院生ワークショップは、世界各国から参加した若手研究者と交流を深める良い機会となった。特に今回から 3 日間に渡って複数のワークショップが開催されるようになったが、このことは一度きりの共同作業で交流を終わらせるのではなく、継続的に他の参加者とコミュニケーションを取ることに役立ったといえるだろう。今回築くことができた研究ネットワークは、継続的に発展させていきたい。一方で、今回この院生ワークショップに参加して、複数の課題も見つかった。筆者にとって今回のセンター会議は、対面で行われる国際会議への初めての参加となったが、異なるディシプリンの研究を行い、文化的背景の異なる他の参加者と交流する際に、多少の障壁を感じたことも事実である。そのため、言語を含む異文化への強い関心と学際的な議論に耐えうる幅広い知識が今後は求められてくるだろう。

また、今回のセンター会議のテーマ設定は筆者の新たな問題関心を引き起こすこととなった。「インサイダー」と「アウトサイダー」という視点から、ドイツとヨーロッパを捉えなおすということが本センター会議のテーマであり、各パネルにおける報告では社会におけるアウトサイダーとなりうる移民の研究が多く見受けられた。しかし、東ドイツ史を研究している筆者は、今回のセンター会議を受けて、ドイツ再統一後の旧東ドイツ市民の統合過程により関心を抱くようになった。再統一後、東ドイツで見られた「オスタルギー」の現象や旧東ドイツ地域での AfD の台頭に結び付けて語られるようになった「二級市民」としてのアイデンティティは、本センター会議の文脈でどのように位置づけられるのだろうか。将来的な研究の射程に含めていきたい。

コロナ危機の様々な障壁がある中で本センター会議の開催及び運営にご尽力頂いた方々、ベルリンでお会いすることのできた全ての参加者に感謝の意を申し上げ、本報告の結びとしたい。

(2023 年 5 月 1 日受理、2023 年 5 月 8 日公開 ※DESK-Miszellen 編集委員会記入)